

5月26日(土) 15:35~16:15 第二分科会:筑紫女学園大学スクワーヴァティーホール

桃山時代の小袖文様における文芸性について
—練縷地片身替四季草花文様縫箔（シカゴ美術館蔵）から—

関西学院大学 山内 麻衣子
YAMAUCHI Maiko

本発表では The Art Institute of Chicago (シカゴ美術館) 所蔵の「練縷地片身替四季草花文様縫箔」を中心に、桃山時代の小袖文様における文芸性について考察する。この縫箔は長崎巖著『在外日本染織集成』(小学館 1995年)において紹介されているが、日本国外に所蔵されていることもあり、これまで十分な研究がおこなわれていない。発表者は近時本作品を詳細に調査する機会に恵まれ、未紹介であった前身頃の文様を含めた全体像を確認することができたので、その詳細を報告したい。

本作品は小袖の形状・染織技法などから桃山時代の縫箔小袖の典型とされ、その意匠構成は松皮菱のような島取りを肩から裾まで通した総文様で、かつ片身替という、趣向を凝らしたものである。島取りや片身替のデザインは室町時代から桃山時代にかけて盛行し、いくつかの作例が残されているが、その多くは肩と裾の部分にのみに文様が施される肩裾のデザインであり、本小袖のように肩から裾まで文様が途切れないことのない縫箔の総文様の作例は少ない。『曇花院装束抄』天文8年(1539)では、染織技法や加飾技法によって小袖が格付けされ、それらは着用者である公家女房の身分の尊卑に対応しているのだが、なかでも総刺繡の小袖は「ぬひ物とおしにては下まじく候。…なにむきと申ほどのくらゐなくてはときゝ候つる。」と、高位の女房に限られている。類例として挙げられる高台寺蔵の「亀甲花菱文様打掛」は、総刺繡で全体に島取りを配するという点が本小袖と共通しており、その豊臣秀吉の正室高台院(ねね)所用という伝来から、本小袖の着用者も桃山時代の上流の女性であったことを推測させる。また本小袖の仕立替の形態は、後に能装束に転用された可能性を示している。

次に文様についてであるが、従来桃山時代の染織意匠は四季の自然や身近な景物を中心と考えられ、そこに文芸的意味を読み取る研究は進んでいない。しかし本小袖には四季の植物を一堂に集める桃山時代特有の文様と共に、文芸的雰囲気を強烈に漂わせるモチーフが施されており、それは近世染織における文芸意匠の最も早い例と指摘できる。各区画の主題は八橋の景や三保の松原といった歌枕を思わせるが、細部を丹念に見ていくと、その限りではないことがわかる。例えば池に落ちた柳の一葉に蜘蛛を乗せた図様は、中国黄帝の臣下「貨狄造船」の故事を表し、それは『遊行柳』等の謡曲の一節に採られている。また飛立つ四羽の鳥の図様は「四鳥の別れ」の情景を表し、その出典は『孔子家語』や『白氏文集』とされるが、これも謡曲『隅田川』等に摂取されている。なお室町時代後期から、謡本の表紙に所収曲を代表する場面や象徴的な事物・景物を描いたものが出てくるが、元盛・宗節章句本等には本小袖の意匠と類似した図像が見受けられる。そのほか『扇の草子』等の絵画作品との関連も考慮しながら、小袖全体に響く文芸的テーマを浮かび上がらせたい。